

二月革命 — ビルマの軍経済、軍官僚主義、軍の旧体制を人民民主主義体制へ代える闘い

ニャン・アウン（ビルマの活動家・作家、ペンネーム）、脇浜義明訳

出典：MR online, 二〇二一年三月二日



2021年2月6日、マンダレーの小グループから発した軍事独裁に対する闘争が全国に波及し、古いビルマ社会の殻が崩れつつある。2月2日に医療従事者が市民的不服従運動を開始し、その後各州の公務員が運動に参加して以来、軍官僚構造が麻痺徴候を見せている。

民間や官立銀行の職員も運動に参加、国民が預金を引き出し、軍事政府への納税拒否を始める人々が増えたので、軍部独裁政権は呼吸が苦しくなり、ただ警察や軍隊や民政官僚トップ層の暴力に依存するしか方便がない。

軍事独裁に抵抗する現象はビルマでは新しいものではない。著名ジャーナリストで政治家であったハンダーワディー・ウー・ティン・ティン（1930～2014）が言ったように、軍事独裁が続く限りビルマでは10年に1度反乱が起きる。現在の全国的闘争は彼の言葉の正しさの証明であり、ビルマの軍事官僚主義的資本主義に内在する矛盾の反映である。

軍事官僚主義的資本主義

400人の「共産主義シンパ」を逮捕した1958年クーデター・リハーサル¹後、軍司令部は軍所有の経済体制建設を始めた。1962年のクーデター後、全産業が「ビルマ式社会主義」の名のもとで国有化された。軍官僚が民政と経済計画を支配した。そのような軍司令部のトップダウン的「社会主義」、下からの民主主義的インプットがない社会主義が成功するはずはなかった。労働者や学生の抗議やストライキが続き、軍は残酷な弾圧で応じたが、経済が衰退、ビルマは後発発展途上国の一つとなった。

1988年、学生の抗議運動を引き金に全国的大衆蜂起となった。抵抗運動の暫定指導者は多党的民主主義システムを要求したが、同時に象徴となるカリスマ的指導者の樹立を欲した。「英雄が国を作る」という個人主義的、通俗ロマン主義的歴史解釈に影響されたのかどうかは分からないが、初め日本軍と共闘して植民地宗主国英国と闘い、後に英国に寝返って抗日戦争を闘って国民的英雄扱いされていたビルマ国軍の指揮官アウンサンの娘、アウンサンスーチーに白羽の矢が当たった。(日本軍と戦った反ファシスト人民自由連盟はアウンサン率いるビルマ国軍(現在のミャンマー国軍の前身)、ビルマ共産党、人民革命党の3派組織であった)彼女は英国で暮らしていたが、偶々病気の母親の看病に帰国していたが、国民の指導者、解放者として祭り上げられた。中国の影響から脱してグローバル資本主義への道をビルマの奨励する西側の政府やメディアは彼女を民主主義のアイコンとして誉めそやした。

スー・チーは決して革命的人物ではなく、公然と支配機構と闘うことはしなかった。リーダー役を引き受けた彼女は、軍の傀儡であるマウン・マウン暫定政権に若干の譲歩を求めただけであった。ゼネストで旧国家官僚体制が崩壊寸前で、行政が麻痺状態で、地方ではスト委員会の民主主義的組織が取って代わろうとしている劇的な時期に、妥協の道を選んだのである。その結果、盛り上がった人民の勢いが弱まった・指導部の日和見主義的で妥協的な姿勢と、一方で吹き荒れる軍部の弾圧暴力のために、ビルマ史上稀な大衆的政治介入が消えてしまった。

再びクーデターが起きた。軍指導部は、時代に倣って、支配形態を一般容認される資本主義的形態に変えようとした。国有企業や輸出入許可権を自分たちの縁故者に格安の価格で売り渡した。ビルマ経済は軍高官とその取り巻きが所有する軍産コングロマリットの支配下に入った。政治面では、軍主導権が色濃い憲法に準拠する憲法に準拠する立憲民主主義体裁が取られた。この憲法は2008年に軍部が起草したもので、一応国民投票で批准された。

2010年政党結成が認められ、種々の選挙が行われた。スー・チー(自宅軟禁を解かれていた)を指導者にした国民民主連盟(NLD)は、多くの国民と同じように、選挙をボイコットし、元軍人から構成される連邦団結発展党(USDP)が勝利した。2012年からNLDは選挙に参加し始め、2015年の総選挙では大勝利した。西側の資金で活躍する評論家やシンクタンクやグローバル資本が支配する国際世論はビルマの「民主化」として称賛した。

実際には、スー・チーはビルマ社会の政治・経済的基礎構造の変革に取り組んだことはな

く、そのまま放置するだけであった。軍事官僚政治はある程度の批判の自由を国民に与えていたが、圧倒的な暴力と権力行使を自由に振るった。グローバル資本主義に参入して富を増やし、労働者を搾取し、農民から暴力的に土地を奪った。やがて、スー・チーと NLD もその政治的召使いになっても不思議でない状態であった。軍事官僚階級の力はそれほど絶大であった。

スー・チーは巨大軍産コングロマリット所有者をどぎつい名称で呼んではいけない、せいぜい「大物実業家」程度の言葉で表現せよと国民に要求した。これは彼女の思想的態度と国民の搾取者嫌悪の両方を、軍事独裁経済体制枠内で妥協的に表現させる言葉である。また、彼女は国際司法裁判所の証言台に立ち、ロヒンギャ・ジェノサイドで起訴されている軍部指導者を弁護した。2020年1月、裁判所はジェノサイドを止めるために「あらゆる手段を取れ」とビルマに命令した。

軍事官僚主義的資本家階級にとって、政治家や代議士は、好きなように雇用したり解雇したりできる使用人である。国民の投票という権力が基盤となっていないのだ。自分の経済帝国を所有し、国際司法裁判所の被告であるミン・アウン・フラインは定年に近づいていた。彼は使用人たちから国際司法裁判所の儀式に生贄の羊として差し出されるのを心配した。本当のボスが誰かをはっきりさせるために、2021年2月1日、彼は軍事クーデターを命令した。軍事官僚主義資本家階級の指導者として、スー・チーら NLD 使用人の逮捕を指令した。

中産階級：市民的不服従運動と赤いリボン運動

クーデターの翌日、医療従事者 — 特に医師 — が市民的不服従運動を開始し、スー・チーや政府役人や議員の釈放と、軍が制定した2008年憲法に準じて行われた2020年選挙で成立した NLD 政府の復権を要求した²。その後幾つかの州の公務員が赤いリボン運動 (RRC) を始め、同じスローガンを掲げて市民的不服従運動に加わった。

労働者や農民は NLD 政権のもとでも軍事独裁政権下と同じように酷い目にあっただから、他の国の人々にはこのようなスローガンが掲げられるのを奇妙に思うかもしれない。しかし、これは不思議なことではない。NLD 政権下では国際市場や援助資金供与者のための政治的・経済的開放政策が採られたので、NGO を含む民間経済部門に少し雇用が創出された。そのために中産階級 — 所得、生活水準、職業、教育水準で規定される — のほぼ全体が恩恵を受けた。

NLD 政権は、コロナ・パンデミックの影響もあって、保健分野に比較的力を入れた。また、公務員は軍人が行政に入ってくるのを嫌う長い歴史がある。事実上軍部支配構造の中でも、一応選挙が行われて文民統治の形が維持されている限り、中産階級はスー・チー率いる NLD 政権の僅かな漸進的变化に満足していたようだった。彼らは軍部に権力を与える憲法の条項は少しずつ変えることができると思っているようだった。

最初、中産階級が採った戦術は勤務拒否など軍事政権への非協力であった。街頭で公然

抗議する危険を避けた。国際社会からの圧力や介入を期待して、直接抗議行動を慎むようにと呼びかけた。中には、軍部は総選挙の不正を調査するために暫定的に国権を奪っただけで、すぐに国権をNLD政府に返還すると言う者もいた。それなのに民衆が街頭抗議を続ければ、国家が無秩序になったとして法と秩序を回復するために、本当のクーデターになってしまうぞ、と言った。

いかなる有力者も団体も半分崩れかかった紛争多発のビルマ社会で進行する階級闘争の勢いを制御できないであろう。軍事クーデターでスー・チーや政治家が逮捕されたことは、旧社会の顔の化粧が剥げ落ちたことを表している。剥げ落ちた後に現れた顔は、軍事官僚主義資本主義という本当の素顔である。そこへ労働者階級と進歩的若者が現れて、その殻を攻撃して、揺るがしているのだ。

労働者階級と進歩的學生

階級闘争が噴出したときビルマの労働者階級は躊躇したことは一度もなく、常に軍事独裁政権にたいする抵抗の先頭に立ってきた。ビルマで大衆運動が起きるときはいつもそうであった。2月5日、マンダレーで勇敢な学生小グループの抗議に続いて、ヤンゴンのラインタヤ郡区の労働者数千人がヤンゴン市中心部をデモ行進した。2月6日、学生自治会の進歩的學生が労働者に合流した。その翌日、南ダゴン郡区の労働者が街頭抗議に加わり、さらに何人かの政治家と市民活動家も加わった。

クーデターに対する抗議は全国に拡大、遠隔地の少数民族も参加し、その数は日毎に増えていった。NLD政権下でも非人間的扱いを受け、軍隊の弾圧とジェノサイド試みのために多数の犠牲者を出した少数民族までもが、NLD指導者釈放と選挙で成立したNLD政府の復活を求める運動に参加した。NLD政権下で抑圧と逮捕や収監を経験した労働者や農民も、同じスローガンを唱えてデモ行進した。

匿名の正義の味方と詐称者

現地での実際の闘争の事実を見ないで、誰が運動指導者であるか、軍部支配階級を支えてきたスー・チーらNLD指導者の釈放を大衆が望んでいるように見えるのは何故か、を正しく理解することはできない。国内メディアと亡命者が外国で造ったメディアの報道は表面的で、本当の内なる事実を伝えていない。もっとも闘争側から見ると、本当の内なる事実は対権力安全対策上あまり表に出せないものであるが。私の説明も一般的概説にならざるを得ない。

進歩的若者たちやラインタヤ郡区と南ダゴン郡区の労働者に働きかけて指導してきたのは、長年オルグや対権力闘争に関わってきた私たちの同志である。職場や地域での経済闘争、階級的連帯、民主主義的労組作りなど長年の経験の中で培われた力の結実である。その力の立ち上がりに応じ、軍事独裁反対という合意に基づいて、他の多くの人々が自然発生的に大衆抗議運動に参加した。

私たちの同志が権力に対する階級的警戒から目立たないように行動しなければならなかったが、日和見主義的運動家や、コー・ミン・コー・ナイン³のような1988年運動時代の旧指導者が取材メディアの前に躍り出て、中身のないことを喋って指導者のふりをする。彼らには大衆的基盤は何もないのだが、昔の有名人としてメディア受けする。ラジオ以外に情報源を持たない地方の大衆にとって、旧有名人がラジオで語る方針、つまりスー・チーやNLD復権が、国民的運動の中心スローガンとなるのである。

軍部作成の2008年憲法の枠内で行われた2020年総選挙に参加した政党の日和見主義的活動家たちは、地道なオルグ活動をしてきた私たちの同志を差し置いて、デモを報道するメディアの前に立って大衆の指導者を詐称した。

何人かの亡命政治家は、個人崇拜的な通俗歴史観に従って、スー・チーを大衆を指導し調整する英雄として提示した。労働者はそのいやらしい見せかけにうんざりしていた。しかし、メディアの圧倒的な影響力という数の力を背景に、これら詐称者たちは、労働者たちの革命的スケジュールを打ち消し、彼らスー・チー救出及び融和的スローガンを前面に押し出すのだ。

しかし、ビルマ人民がスー・チーを敬愛していると考えた政治的分析は軽はずみであろう。人民は何をおいてもまず軍事政権との闘いを優先しているのだ。軍事政権を倒さない間に、連帯・団結にひびを入れるかもしれない問題にふれないだけなのだ。私たちは常に「勝利は連帯と団結から生まれる」と口にしていて、NLDがどこから資金提供を受けているかといった問題は、当面の敵を倒した後に取り上げればよいのだ。

今や捕らわれの身となったスー・チーを解放者とする幻想のもとで力を合わせる人々が多いのは事実である。解放者が捕らわれ人に、捕らわれ人が解放者になるのは歴史の皮肉である。しかし、ビルマの進歩的人民は「上から救い主が現れない」⁴というインターナショナルを歌って闘っている。私たちの同志は、闘いの中で自分たちの現状分析の正しさが立証されると信じて、労働者階級と進歩的學生とデモを続けている。

人民代表院⁵

クーデター当日、国軍はNLD政府役人と数人の議員を逮捕した。2月5日、新首都ネピドーの庁舎の中に住んでいた残りのNLD議員たち人民代表院委員会という独自議会を結成した。彼らは議会招集と新政府樹立を要請した。クーデター政府は正当な政府ではなく、ウー・ウィン・ミン大統領のNLD前政府が正当であるという声明を出した。実質的意味がある行為ではない。事実上国家の建物の中に軟禁されているし、正当な政府を構成する人々も逮捕されているのだ。それに、彼らが読み上げた誓約文は軍部作成の2008年憲法を守るという文であった。

彼らは1988年民主化運動の間の元首相ウー・ヌーの政治的態度の後を追っているようである。当時、ウー・ヌーは1962年にクーデターで自分の議会政府を転覆させたネ・ウィン將軍の政府は正当ではなく、正当なのは自分の政府で、国権を自分に返すべきだと言

った。しかし、1988年の民衆蜂起の中に何の基盤も持っていなかったもので、単なる空言で終わった。現在のNLD議員たちの独議會も大衆的基盤がないので、張子の虎にすぎない。

ある政党の指導者たちは、人民代表院委員会に自分たちを入れて拡大し、暫定政府樹立に向かおうと言っている。2020年選挙で敗北をしたツケを、これを機に取返し、政府に入ろうとするいやらしい魂胆が見え見えである。軍部作成の憲法の枠内で政治行動する限り、NLDも他の政党も軍部を克服することはできない。ウー・ヌーの党と同じように、歴史の一頁を飾るだけで終わるであろう。かりに軍憲法の枠内で政治的解決が実現できたとしても、それは軍事官僚主義的資本主義の問題の解決にならず、階級闘争の目からみれば再び幻想を見るだけである。

軍部の弾圧

今や軍政府は警察力、兵隊、トップ官僚の抑圧装置以外に依存するものがない。2月7日ミャワディのデモに対し警察機動隊は実弾を発射した。何人かを逮捕したが民衆の圧力のもとで後に釈放した。私たちの同志は各村や町に自治組織の防衛委員会を作ろうと書いたパンフレットを散布して、人々に働きかけた。防衛委員会が郡区行政当局から独立し、郡区のスライキ委員会の指示で動くものとした。2月10日頃から郡区行政当局と警察が、市民的不服従運動に関わる人々やNLD議員の家を夜襲し始めた。

さすがに日和見主義的1988年世代の旧指導者も私たちが提案した防衛組織を一部取り入れ、地域警備隊を作って住民の安全を守ろうと言い始めた。ただ、彼らの提案は、夜襲者が来たら鍋や釜を叩いて追い返せという戦術だった。私たちはそんな戦術では何にもならないと言って、防衛委員会の若者に5人単位の小集団で夜襲者に対抗し、彼らの武器と通信手段を取り上げ、必要とあれば街頭闘争でこちらも武装することを提案した。やがて軍政府は夜襲部隊に兵隊を使うようになった。兵隊は容赦なく実弾を使った。1988年世代の戦術は瞬く間に崩れ去った。

2月10日、機動隊は放水砲でデモ隊を散らし、群衆に実弾を発砲した。19歳の少女ミャン・テッ・テッ・カインが弾丸に当たって死んだ。2月14日、ミッチーナードでデモ隊は機動隊の発砲を受けた。マンダレーでもデモ隊に実弾が撃ち込まれた。実弾、催涙ガス、放水砲は夜襲でも使われた。2月14日以降ヤンゴンの中央銀行付近には戦車が展開された。

次の段階

軍政府は暴力を最後の頼みの綱にして半狂乱になっている。それでも市民的不服従運動の中産階級の人々はまだ非暴力抵抗の幻想にしがみついている。そのうち米軍(!)か国連平和維持軍がビルマにやってくると信じ、その神話を話して、それまで非暴力的市民的不服従運動を維持すべきだと主張している。

1988年世代指導者の一人コ・コ・ジは軍部との交渉によって和解する道を提案している。独裁権力と和解して一部権力のおこぼれを得ようとする野心が見え見えである。血を流

して闘っている人民はどのようにでも操作できるという人民軽視の姿勢が見え見えである。こういう人間の計算通りにはいかないだろう。人民が本当に望んでいるのは軍事官僚主義資本主義の壊滅である。私たちの政策である三つの軍事 — 軍事経済、軍事官僚主義、旧軍事社会体制 — と闘って、それを人民民主主義機構に置き換えるという政策に合致するものだ。軍事官僚主義資本主義者との妥協をしないことは、人民も同意している。

私たちが提案する次の段階は、すべての郡区に郡区ゼネスト委員会を設置し、各地区の防衛組織による防衛委員会を形成、攻撃者の暴力装置の武器を奪い、こちらの民主主義機関をいかなる手段を使ってでも武装し、やがて、それぞれの郡区やゼネスト委員会から選挙で選ばれる代表で構成する国民会議を招集、暫定的革命政府を樹立、軍事政権下で働く警察官や兵士に武器を捨てて暫定的革命政府に帰順するよう呼びかけることだ。その一方で大衆蜂起をいっそう拡大する。

上から救い主は現れない

もはや、誰もビルマ人民を軍事官僚主義資本主義社会の古い殻の中に戻し、以前と同じ葛藤を我慢させることはできない。旧社会の旧殻との和解を奨励するブルジョア民主主義もグローバル資本主義も、ビルマの矛盾を解決できない。

問題解決の唯一の道は旧社会を壊し、その灰の上に農民や労働者など圧倒的多数のビルマ人民の役に立つ新しい人民民主主義社会を建設することだ。

それを実現する上で私たちが肝に銘じなければならないのは、インターナショナルの歌詞の一句、「上から救い主は現れない」だ。

訳注

¹ この後ネ・ウィン将軍の暫定内閣が1958～1960年間続き、1960年の総選挙で民政・軍事の連立内閣となるが、62年にネ・ウィン将軍のクーデター、ビルマ式社会主義を掲げた。88年民主化運動高揚。国軍最高司令官がクーデターを起こすが、総選挙実施を約束。それに備えてアウンサンスーチーらの国民民主同盟が結成されるが、選挙前にスー・チーは自宅軟禁。89年軍政府はミャンマーに国名変更。2008年新憲法、2010年総選挙、2015年民政復帰後の初総選挙、国民民主同盟圧勝、事実上のスー・チー政権が始まった。

² 議席の25%を国軍司令官の指名する軍人議員とするとか、非常事態には全権を司令官に委譲することを規定するなど、国軍の権力掌握の継続を保障した憲法。

³ 1988年の民主化運動で学生運動のリーダーとして注目を浴びた人物。

⁴ 「インターナショナル」の2節の歌詞。日本語訳の「インターナショナル」にはない。

⁵ ビルマの議会は、人民代表院（下院）と民族代表院（上院）の二院制。